

# 立命館高大院接続システムの構築に向けて

— 高大接続教育の新展開、各学部（特にグローバル系学部）との連携・強化 —

川 口 潔

## 要 旨

立命館学園は、立命館大学、立命館アジア太平洋大学（APU）のほか、1小学校、4中学校、4高等学校を擁している。各学校での特色ある先進的な取り組みにより近年は国際化・グローバル化に対応した教育・教学が展開されている。

こうした中、附属の高等学校から立命館大学およびAPUに進学せずに他大学へ進学する生徒も見られ、改めて附属校と立命館大学との教育接続を強化することが課題となっている。大学進学の間では新たな入試方式の検討も必要となっており、「共に育てる」というコンセプトでの高大接続教育をパイロットプログラムとして開始した。

本稿は、現在の到達点に至る全学委員会等での議論や検討状況について歴史的に振り返るとともに残された課題と今後の展望を示すものである。

## キーワード

高大接続教育、高大連携、探究型学習、課題研究、教学（教育）の国際化・グローバル化、スーパー・グローバル・ユニバーシティ（SGU）創生支援事業、学園ビジョン R2030 立命館大学チャレンジ・デザイン

## はじめに

現在、立命館大学には2019年度に設置されたグローバル教養学部（GLA）を含めて、16学部が存在している。2000年度に開学した立命館アジア太平洋大学（APU）の2学部と合わせると18学部を擁する総合大学・総合学園となっている。このような到達点にあるのは、近年の地球規模で生起している諸課題の解明と人類社会の発展、世界的レベルでの進歩と幸福の追求に向けて、大学がフィールドとしてカバーすべき学問領域が拡大してきていることを受けての結果でもあると言える。

一方で、立命館学園は、立命館中学校・高等学校、立命館宇治中学校・高等学校、立命館慶祥中学校・高等学校、立命館守山中学校・高等学校、さらに立命館小学校という初等教育・中等教育段階の学校を擁している。これらの学校群を「附属校」と総称している。

本稿では、立命館大学と附属校の内、特に各高等学校との間での「高大接続教育」を巡る検討

経過を振り返るとともに、その中で浮き彫りとなった課題や問題状況、それらをどのように克服していくべきかの方向性や政策展開についての論議や論点を過年度の全学委員会等の資料をもとに振り返りたいと考えている。したがって、本稿は、新たな知見や新制度等について提起する「研究論文」としてではなく、論議経過を「報告」としてとりまとめ、今後に残された課題を明らかにするための一つの考察であると位置付けたい。本稿が、R2030 チャレンジ・デザインを展望する立命館学園の今後の発展に少しでも寄与することができればと考える。

筆者は、2016 年度入学センター次長、2017 年度入学センター事務部長、2018 年度入学センター担当部長（入学政策）、2019 年度および 2020 年度一貫教育部担当部長（高大接続）を歴任してきた。本稿で取り上げた全学委員会・会議体には、所属や役職は違うものの何らかの形で関わる機会を得ることができたし、課題設定、検討方針の策定や新たな政策提起などを行って行く立場でもあった。このため、以下の記述では、委員会としてとりまとめたことや課題設定としたことと、筆者自身の考えとが重なる部分が少なからずあり、委員会での検討内容や提起したことを引用しているのか、筆者が捉えたことなのか十分に区別されていない箇所があることをご容赦いただきたい。

## 1 立命館大学におけるより一層の国際化・グローバル化に向けた教学展開

### 1-1 立命館大学のグローバル教学の進展

立命館大学は、1988 年度に西日本の大学では初めてとなる国際関係学部を設置して以降、国際センター（現在の国際部に相当する）を学内外の国際交流の拠点として整備、2009 年度からの『グローバル 30 (G30)』<sup>1)</sup> 採択などを受け一層の国際化に全学をあげて取り組んできた。

そうした立命館大学の取り組みと並行して、2000 年度には大分県別府市に同県・同市からの大学誘致を受け、大型公私協力のモデルともなるような APU を開学した。

こうした国際化・グローバル化への対応としての教学展開は、今後の日本と世界の趨勢を見通した上で、学内における喧々諤々の議論の末に切り開いてきたことであった。

### 1-2 スーパーグローバル大学創成支援事業への参画

そして、日本国政府・文部科学省としても、「世界トップレベルの大学との交流・連携を実現、加速するための新たな取り組みや、人事・教務システムの改革、学生のグローバル対応力育成のための体制強化など、国際化を徹底して進める大学を重点支援するため、平成 26 (2014) 年度から『スーパーグローバル大学創成支援事業』<sup>2)</sup> を実施」することとなった。「同事業には世界レベルの教育研究を行う大学『タイプ A (トップ型)』(13 大学) と日本社会のグローバル化を牽引する大学『タイプ B (グローバル化牽引型)』(24 大学) の 37 大学が採択され、徹底した国際化と大学改革を進め」ていくとしている。

立命館大学、APU ともこの SGU 創成支援事業に「タイプ B (グローバル化牽引型)」に採択・選定されるべく学内での検討を深めることとなった。そして文部科学省から求められた SGU「構想調書」において、10 年間の学部・大学院研究科での国際化・グローバル化を見据えた計画を検討、策定するに至った。

『立命館大学の取組概要』3) としては、「グローバル・アジア・コミュニティに貢献する多文化協働人材の育成」を掲げ、10年間の計画概要として「①グローバル・アジア・コミュニティへの寄与—アジアから世界の在り方を問い直す—②アジア・リテラシーの探求・確立と発信③アジアの高度人材育成の拠点—アジア科学技術共同体への寄与—④アジアのイノベーション牽引人材育成の拠点—アジア・イノベティブ人材—⑤『学びの立命館モデル』構築⑥JD、DDの拡充展開⑦Top Global Universityとしてのアジア研究の展開⑧グローバル広報戦略の確立⑨グローバル化に対応した基盤整備⑩国際協力事業の積極的展開と海外ネットワークの構築」を打ち出した。

『2023年度までの目標』4) は、「①外国人および海外の大学で学位を取得した専任教員数630人②海外留学経験者数3,200人③海外拠点の数7拠点④受け入れ外国人留学生数4,500人⑤海外でのインターンシップ、国際PBLプログラム数100科目以上⑥混住型国際寮に暮らす日本人学生200人、同寮に暮らす外国人留学生1,100人⑦海外大学・機関との交流30団体⑧多文化協働・異文化体験プログラム参加者数1,800人など」を掲げている。

このスーパーグローバル大学創成支援事業は多数の国公私立大学が応募したが、立命館大学およびAPUの2大学とも「タイプB（グローバル化牽引型）」に採択された。

SGU創成支援事業で全学をあげた取り組みを進めた立命館大学の学部教学の国際化・グローバル化の進展の結果として、2011年度の国際関係学部グローバル・スタディーズ（GS）専攻、2018年度のアメリカーン大学・立命館大学国際連携学科（JDP）、2014年度の政策科学部Community and Regional Policy Studies（CRPS）専攻、2017年度の情報理工学部システムグローバルコースなどが相次いで設置された。これらはいずれも英語による授業科目のみで大学卒業資格・学士が取得できる英語教育プログラムである。国際関係学部のJDPでは連携大学である米国アメリカーン大学（AU）への2年間の留学、GLAでは連携大学であるオーストラリア国立大学（ANU）への1年間の留学がセットとなっているなど、多彩なプログラム展開となっており、全国的にも他に例の無いプレミアムな教学内容となっている。

### 1-3 大学の世界展開力強化事業【キャンパス・アジア中核拠点形成支援】への参画

一方で、文部科学省の『平成23（2011）年度 大学の世界展開力強化事業【キャンパス・アジア中核拠点形成支援】』5) に採択された文学部キャンパス・アジア・プログラムは、英語教育ではなく、日本語・中国語・韓国語による授業科目により実施され、京都の衣笠キャンパス、韓国・釜山の東西大学校、中国・広州の広東外語外資大学の3つの大学を巡り、各国の歴史・文化・社会を現地の言葉で学ぶプログラムである。これは文学部が2003年度以降、東西大学校および広東外語外資大学と築いてきたネットワークをもとに策定されたものであり、3大学による「移動キャンパス」という構想が意欲的な取り組みであり、4年間を見通す総合的な人材育成プログラムの開発を目指す姿勢も高く評価され採択されたものである。

本事業における交流学生数は、5年間の計画期間を通じて計画で掲げた派遣180人、受入245人に対して実績は派遣224人、受入261人と計画を上回る成果をあげた。文学部では、本事業採択期間終了後も継続してこの教育プログラムを実施している。

本稿のテーマである「立命館高大院接続システムの構築に向けて—高大接続教育の新展開、各学部（特にグローバル系学部）との連携・強化—」を深めるにあたっては、こうした立命館大学

における国際化・グローバル化の教学展開がその背景となっていると言える。そしてJDPやGLAの設置など、これまでに無いようなプレミアムなグローバル教学の展開にあたって、その学部の発展をいかに支えていくべきなのか、学園を構成している附属校の存在にスポットがあたることとなった。

## 2 立命館大学グローバル・イニシアティブ推進本部会議の設置と取り組み

### 2-1 立命館大学グローバル・イニシアティブ推進本部会議の設置によるSGU創生支援事業の推進

立命館大学グローバル・イニシアティブ推進本部会議（GI推進本部会議）は、2014年10月15日の常任理事会で設置を決定したもので、総長・立命館大学長をトップにした全学役職者、全学部長・全研究科長、関係役職者による会議体であり、SGU構想調書で掲げた取り組み内容・目標設定数字の達成状況などの進展について確認し今後の課題の洗い出しと新たな方針策定などを検討するための全学体制として設置され、2015年1月28日に第1回会議を開催した。まさに、SGUで掲げた立命館大学のグローバル化を実現していくための課題について、各学部・各大学院研究科、各部門における到達点を明らかにしつつ、SGUで実現すべき目標の達成のために必要な項目を洗い出し、一つひとつをどう具体化していくのかを進めることがこの会議体のミッションであった。SGUの推進、目標の達成に向けては、学外の委員からなる外部評価委員会も設置され、その委員会による外部評価で指摘された課題や問題についても受け止めてこれらを解決していくための推進体制でもあった。

表1 立命館大学グローバル・イニシアティブ（GI）推進本部会議委員構成

本部長	吉田美喜夫	総長
本部長代理	市川 正人	副総長
副本部長	渡辺 公三	副総長
	松原 豊彦	副総長
本部委員	長田 豊臣（理事長）、森島 朋三（専務理事）、建山 和由（企画担当常務理事）、志磨 慶子（総務担当常務理事）、高橋 英幸（財務担当常務理事）、川崎 昭治（一貫教育担当常務理事）、竹濱 修（法学部長）、中本 悟（経済学部長代行）、池田 伸（経営学部長）、有賀 郁敏（産業社会学部長）、文 京洙（国際関係学部長）、重森 臣広（政策科学部長）、品田 隆（映像学部長）、藤巻 正己（文学部長）、笠原 健一（理工学部長）、仲谷 善雄（情報理工学部長）、里見 潤（生命科学部長）、今村 信孝（薬学部長）、田畑 泉（スポーツ健康科学部長）、赤井 正二（総合企画室長）、米山 裕（教学部長）、花崎 知則（入学センター部長）、言美 伊知朗（入学センター部長）、サトウタツヤ（研究部長）、牧川 方昭（研究部長）、山本 忠（学生部長）、佐久間春夫（学生部長）、石原 一彦（キャリアセンター部長）、佐上 善和（法務コンプライアンス室長）、上杉 謙司（一貫教育部長）、野口 義文（研究部事務部長）、塩田 邦成（社会連携部長）、相根 誠（情報システム部長）、田尻 実（総務部長）、西川 幸穂（人事部長）、志方 弘樹（財務部長）、宮下 明大（入学センター次長）、浅野 昭人（学生部次長）、松原 修（キャリアセンター次長）、武山 精志（図書館次長）、中上 晶代（総務部次長）	
事務局長	石原 直紀 国際部長	
副事務局長	金山 勉（国際連携室副室長・国際部副部長）、山本 修司（教学部事務部長）、大島 英穂（国際部事務部長）、木田 成也（総合企画部長）	
事務局	国際連携課（主管）、総合企画課、国際部、教学部、研究部、入学センター、学生部、キャリアセンター、一貫教育部、総務部、人事部、財務部	

\* 「第1回 立命館大学グローバル・イニシアティブ（GI）推進本部会議」  
（2015年1月28日）資料より作成



## 2-2 GI 推進本部会議での課題設定と論点

GI 推進本部会議での論点の一つとして、立命館学園に設置されている附属高校から立命館大学への入学者数が漸減傾向にあり、他大学へ入学する傾向が見られるのではないかと、いわゆる「流出問題」をいかに食い止めるのかということがあげられた。

2017年12月15日に開催された第11回GI推進本部会議での審議事項は、「総合学園のグローバル化を一層推進するための検討課題について」であった。

この中で、「1. 現状について (2) 附属校の現状について」の記載では、「各校の状況として、①在籍者の20.5%が国際系コースに所属②帰国生が7.2%在籍しており特に立命館宇治は21.6%在籍③留学経験者が10.4%おりそのうちの75%は1カ月以上の留学を経験している④海外研修(就学旅行等)経験者は87.8%いることがあげられた。また、一貫教育部からは、各附属校の生徒が受講できるプラットフォーム(UBC長期派遣:3カ月15人、DCU短期派遣:1カ月50人、英語トップアッププログラム:1年間22人など)を提供している」とされた。

一方、「(3) 高大接続について」の記載では、「学内進学状況として①推薦枠は在籍者の1.4倍を設定している②推薦枠の充足率は98%(経営学部)から29%(情報理工学部)で全学では57%である③学内推薦以外で指定校推薦、AO入試で進学する生徒もいる④IB特別入試は一部学部のみで実施とされ、留学経験では、①派遣者比率が全学平均よりも若干高い②3カ月以上の派遣者の比率は高い」とされた。

「2. 検討課題について」では、「(1) 入試制度について、附属校の教育成果が大学につながる入試制度を具体化する。例えば、学内推薦入試の外枠としてグローバル化対応推進枠(『附属校国際入試』(仮称)としTOEFL等の基準を満たす生徒が対象)を設定(国関JD、GLA進学枠)」との例示がされた。「この課題は入試企画委員会での検討を要請するとし、進学実績と整合する学内進学入試枠の設定を将来的な検討課題とする」とした。

そして、「高大接続教育の推進にかかわっては、『附属校と大学との高大連携検討委員会』の検討が進行中であり、そこでの検討を踏まえる。」「高大接続に関する大学と附属校との恒常的な研究会(たとえば、グローバル教育研究会等)を組織することを具体化する」とされた。

前章で示したような、立命館大学で、とりわけグローバル教学展開を大学が本格的に取り組む中で、優秀な附属高校の生徒が他大学の国際系学部に進学していることをどう食い止め、立命館大学に入学してもらうのか政策的検討の必要性が大きな課題となった。

改めて、附属高校から立命館大学へどのような入学ルートがあり、どのような実態となっているのか、データを整備すると、学内推薦入試、特別指定校推薦入試(慶祥・宇治)、その他一般入試での挑戦などとなっていることが判明した。しかし、メインストリームである学内推薦入試に関して言えば、他大学の入試、たとえばAO入試への挑戦は可能だが、立命館大学の各学部AO入試を受験する場合には、学内推薦入試における被推薦権を放棄したと見なす取扱いがある実態も明らかとなった。

こうした実態を解明する中で、GI推進本部会議での論議・検討状況としては、①附属高校の優秀な生徒やグローバル志向の生徒の他大学への流出を防止することの重要性②学部のグローバル教学を支え、リードする学生を確保するという点からもお膝元の附属高校の生徒を大事にすることの重要性③高校と大学(学部)とが協働して教育活動を展開し、共に生徒を育てていくこと

(共有) の重要性などを確認することとなった。

2018年1月31日に開催の第12回GI推進本部会議では、「グローバル・イニシアティブ推進課題の検討状況について」を議題としたが、ここでは、「1. 入試制度について」の中で、「『附属校特別国際入試(仮称)』の具体化、学内推薦入試の外枠とし、附属校の区分なく事前プログラムの受講または資格を有する者を対象とする」と整理された。そして「入試企画委員会で本年度内に結論を出す(2019年度入試から先行して国際関係学部で実施)」とした。

### 3 「附属校と大学との高大連携検討委員会」の設置と取り組み

#### 3-1 「附属校と大学との高大連携検討委員会」を設置

前章で述べたGI推進本部会議での検討や取り組みと並行しつつ、2017年3月8日に開催の常任理事会スプリングレビューでの一貫教育部からの「附属校教育の到達と課題」についての報告、「2017年度立命館大学と附属校・提携校との高大連携(接続教育)方針及び2016年度総括」(2017年4月10日教学委員会、4月19日一貫教育委員会)で示された近年、附属校卒業生が他大学へ進学する傾向が強まる状況の中で、立命館大学・APUとの接続教育の改革がいっそう重要になっていることから、附属校と立命館大学との新たな連携のあり方について検討することが求められるとされ、「附属校と大学との高大連携検討委員会」を一貫教育委員会の下に設置することとした。

「附属校と大学との高大連携検討委員会」での課題設定として、①児童・生徒の主体性・意欲の向上を促す学部・院の専門研究との連携のあり方②意欲の高い附属校生徒向けのパイロット事業的教育プログラムのあり方をあげた。

表2 附属校と大学との高大連携検討委員会委員構成

委員長	松原 豊彦	副総長
副委員長	藤巻 正己	学長特別補佐(一貫教育担当)
副委員長	小島 敏夫	常務理事(一貫教育担当)
副委員長	永井 清	教学部長
委員	言美 伊知朗	入学センター部長
委員	笠原 健一	理工学部長
委員	君島 東彦	国際関係学部長
委員	山下 洋一	教学部副部長
委員	東谷 保裕	一貫教育部副部長
委員	文田 明良	立命館守山中学校・高等学校副校長
専門委員	大坂 博幸	理工学部教授
専門委員	西谷 順平	経営学部教授
専門委員	本郷 真紹	理事補佐(国内渉外・広報等)
【事務局】		
事務局長	岩崎 成寿	一貫教育部長
事務局次長	三浦 誠	一貫教育部副部長
事務局	山本 修司	教学部事務部長
事務局	川口 潔	入学センター事務部長
事務局	藤井 元	一貫教育部次長(主管)
事務局	一貫教育課(主管)、学事課、教学課、入学政策課	

\* 「第1回附属校と大学との高大連携検討委員会」(2017年7月12日)資料より作成

同委員会は1年間に及ぶ検討を進め、2018年1月10日開催の委員会で「R2020後半期以降の立命館大学と附属校との高大接続について—『附属校と大学との高大連携検討委員会』報告—」を確定し、検討のまとめを全学討議に付した。各学部教授会を初め、各附属校、事務部門での討議に付された。そして、「意見集約結果を踏まえたR2020後半期以降の立命館大学と附属校との高大接続について—『附属校と大学との高大連携検討委員会』報告—」として2018年4月18日開催の一貫教育委員会で議決、4月25日の常任理事会へ報告することとなった。

同文書では、「2. 高大連携の到達点と課題」として「本学の附属校は、2006年の立命館小学校、立命館守山高校の設置により、現在では4中高・1小学校、児童・生徒数約7,000人の規模となった。また、各校の特色化が進展し、4-4-4制12年一貫教育、SSH・SGH指定、イマージョン・国際バカロレア教育、ICT教育、全国レベルの課外活動等を通じて、立命館大学で活躍する人材を輩出する一方、国内外難関大学進学者も増え、進路の複線化が進むに至った。

一方、立命館大学は、2004年度情報理工学部設置以降、2019年度設置予定のグローバル教養学部を入れると、10年間で9学部から16学部へと大幅に拡充してきた。その教学内容も、英語によるコース・専攻・学部の設置や、大学院政策の展開など、学部の特色をいかした多様な展開を行うに至った。こうした状況の中で、大学進学後に学部教学の核として活躍する人材育成を目的に、立命館大学各学部と各附属校は一貫教育部を事務局として高大連携を展開し、学内推薦制度による人材輩出を進めてきた。しかしながら、前述の通り、大学・附属校双方が10年で大きな変容を遂げているにもかかわらず、今次の学部・関連部署との連携は優秀層の誘導や育成を目指したものを一部含みつつも、全体としては広く動機付けによる基礎学力の向上や学部理解の促進によるミスマッチの解消を目的として展開されているにとどまるなど、基本的な構造はほとんど変化無く今日に至っており、今次の状況の中で期待されている機能を十全に果たしているかについて、あらためて見直す時期に来ていると言える」と分析した。

さらに、「3. 高大連携の果たす役割と今後の検討の方向性」として「R2020後半期および2020年以降に高大連携・接続の取り組みが果たすべき役割は、大きく以下の点にあると考えられる。(1) 大学教育に早期に触れ、大学における学びに備える。高校段階とは大きく変わっていく大学での学びに高校段階(場合によってはもっと早い段階)から触れ、大学における主体的・自立的な学びの準備と基礎学力の定着を進める機能、(2) 個別学部の教学に深い関心を持つ優秀層を早期に動機付け、学部へ誘導する。学部教学との関係で、いわゆる『とがった』層を動機付け、早期に学部へ誘導し、学部における『核』となり、大学院進学も積極的に考えるような学生として育成する機能、(3) 学部と生徒のマッチングを進める(ミスマッチを起こさない進学)。学部が多様化し、生徒の高校段階までの学びも従来よりも多様化している中で、学部進学に際してミスマッチを起こさないよう、学部教学の内容や魅力を十分に伝え、生徒の関心ある領域との『マッチング』を進める機能」を指摘した。

しかしながら、「特に(2)に関して、大学(学部)の側においては、現状、高大接続で迎え入れた優秀な学生を更に伸ばしていくような高・大・院が接続した教育システムを持ちえているとは言い難いことが課題である。そのため、結果的に他の入学者と同様の教学システムの中での教育に留まることとなり、その個性・特徴を十分に活かしていきにくい状況にある。優秀層が現実には他大学に進学していく状況を改善することは、『選ばれる大学づくり』の観点からも急がれ

る課題である。『グローバル化の展開』、『理系人材の育成と確保』など道筋が明確なテーマについては、教学に関わる喫緊の課題として捉え早期に具体化していくことが求められる」とした上で、「2018年度からの具体的な取り組みとして、意欲の高い附属校生を対象とした具体的な取り組みを、大学と附属校が連携する『パイロットプログラム』として具体化し、対応が可能な学部から進めることを提案する」とまとめた。

さらに、「4. 小学校から大学院までを接続する新たな一貫教育推進のための課題（1）主体的学習者の育成にむけた高大接続の強化」では、「パイロットプログラムの具体化（一部2018年度より先行実施を含む）」として「従来から学部単位で、夏休みを活用したセミナーやフィールドワーク等、生徒が学生・院生とともに探究するプログラムは実施されてきた。それらの成果を継承・発展し、より早い時期から高大が共に優秀層となる附属校生を育成しかつ学部入学後の学びにも結びつける新たな『パイロットプログラム』を試案として提案する。その基本スキームは、前述した高大連携の役割のうち、『個別学部の教学に深い関心を持つ優秀層を早期に動機付け、学部へ誘導する』ことを念頭に置き、『生徒の知的好奇心を刺激し、意欲と創造性を伸ばす機会（セミナー）を大学が設定する』、『大学と附属校、教学部・一貫教育部による共同運営体制を取る』、『一定の評価を受けた生徒は教学との連続性を実現する入試（今後はAO入試）による入学を可能とする』ものとする。現在の学内推薦制度においては、原則として学内推薦枠を有する学部・学科へのAO入試受験は認めない旨の申し合わせをしているが、パイロットプログラムにつながるAO入試については、それを認めることを前提とする。

このスキームを基盤とすることで、現在課題となっている『増加する優秀層のグローバル系進学希望者が希望学部・学科に進学できず結果的に他大学に流失せざるをえない構造的問題』の解決をはじめ、学部における学びへの高い意欲と問題意識を有する生徒の進路実現が可能となる」 「本委員会では、教学課題としての大学と附属校との連携について検討を進め、具体的モデル例として、グローバルおよびサイエンス分野におけるパイロットプログラムを検討した。今後は検討委員が所属する関係で、国際関係学部と理工学部のモデル例となっているが、2018年度から実施可能な企画については先行実施することも検討している。これを参考に、各学部における教学の特色をいかした多様なパイロットプログラムが具体化することを期待する」とした上で、末尾には【パイロットプログラムの実施モデル例】として事例1「グローバル化の展開を目指すパイロットプログラム（国際関係学部）」と事例2「理系人材の育成と確保を目指すパイロットプログラム（理工学部）」を記載した。

以上のように、高大院接続システムの構築に向けた、新機軸として附属校での国際理解教育や各種海外留学プログラムなどで培われたグローバル人材である優秀な生徒をいかに立命館大学のグローバル系教学を展開してきている学部への進学に結び付けることができるのか、また附属校で展開してきている探究型学習＝「課題研究」の取り組みを主に立命館大学の理工系学部とどのように結び付けていくことができるのかという課題について、パイロットプログラムの事例まで示すことで早急に具体化することの必要性和重要性を強く訴えるものとなった。

### 3-2 「2020年度以降の入学者構造・選抜のあり方検討委員会」報告での指摘

文部科学省が主導してきた「高大接続改革」の第一段階となる2021年度大学入学者選抜の見



直しに関しては、当初①大学センター試験を国語と数学での記述式問題を含む大学入学者共通テストに変更すること②英語4技能を測定することのできる英語外部検定試験を導入すること③受験生の多面的・主体的な学習状況を把握し入学者選抜を行うこと、そのためのインフラともなるJapan e-Portfolio (JeP) の整備と活用などが想定されていた。第二段階は新学習指導要領にもとづく2025年度大学入学者選抜において、試験問題の出題内容の見直しが求められることとなる。

現時点では、第一段階で想定されていた改革案はほとんど先送りとなり、記述式問題を含まない大学入学者共通テストがようやく実施されることとなった。こうした当初の想定から大きな変更が余儀なくされているが、立命館大学では常任理事会の下に「2020年度以降の入学者構造・選抜のあり方検討委員会」を設置し、個別大学としての「高大接続改革」をどのように進めていくべきなのかを検討してきている。

「附属校と大学との高大連携検討委員会」での議論と、同委員会での議論は相互に関連しつつ並行した検討が進められた。2018年6月20日に開催の「高大連携検討委員会」では、2018年度と同委員会の基本課題の設定と進め方について確認しているが、この中で学内推薦入学試験に関する「あり方検討委員会」での検討状況を次のように引用している。

「2020年度以降の入学者構造・選抜のあり方検討委員会」の検討状況報告より（2018年4月18日 常任理事会）

附属校入試は、指定校推薦入試も限定的に実施しているが、基本的には学内推薦入試に集約されている。この推薦制度を前提として各附属校では進学指導が行われ、各学部で受け入れているが、生徒の志望学部に対する進路保障の観点から募集定員に加え上限枠を設けて調整範囲を設定している。附属校においては基本的に評定平均値により推薦入試で出願する学部を決しているが、大学から見れば、各学部のアドミッション・ポリシーに基づく選抜方法とは必ずしも言えず、生徒にとっても、希望する学部を目指すにはどのような学修や力量形成を必要とするのかについて分かりにくいという課題がある。また、予め定めた学校推薦枠に対して生徒の志望動向が学校ごとに異なりながらも、推薦枠の学校間調整をすることの難しさもある。さらに近年、附属校から海外を含む他大学進学の実績が伸びており、大学として、附属校の優秀な生徒を獲得するための方策が必要となっている。

この指摘を踏まえて、「高大連携検討委員会」は、「高大連携の事業は、必ずしも学部選択を主たる目的として実施されるものではないが、附属校の他大学への進学実績の伸びが、単に他大学進学を目的とするコースからの進学に留まらず、本来立命館大学に進学することを前提としたコースにおいても他大学進学者が出ていること、しかもいわゆる優秀層の『流出』問題として現れているという側面から問題を捉える必要がある」との受け止めを行っている。

### 3-3 「学内特別選抜入学試験」の新たな導入

2017年度の「高大連携検討委員会」での検討まとめとその全学意見集約結果も踏まえて示されていたパイロットプログラム事例の一つである附属校生徒を対象とした新しい入試方式である国際関係学部、GLAでの「学内特別選抜入学試験」が2019年度入学者向けに新設されることとなった。

とりわけ意欲的に取り組んだ事例として、国際関係学部でのセミナー受講とセットによる学内特別選抜入試の実施があげられる。このセミナーは、英語スコアアップと国際理解講座やプレゼンテーション等を集中的に実施するもので、セミナー修了者には学内選抜特別入試の出願資格を

付与するものとして制度設計された。

国際関係学部高大連携プログラム「GS/JD セミナー」への参加者は、2018 度 4 名、2019 年度名、2020 年度 7 名の参加であった。2020 年度はコロナ禍の影響を受けて、2 日間とも Zoom を利用し遠隔での実施となった。

「2019 年度国際関係学部高大連携プログラム『GS/JD セミナー』および『学内特別選抜入試』実施のお知らせ」(2019 年 6 月 3 日)より一部抜粋

<p>1. GS/JD セミナー</p> <p>(1) 日程・場所 2019 年 8 月 1 日 (木)・2 日 (金) 衣笠キャンパス 恒心館</p> <p>(2) 募集人数 15 名</p> <p>(3) セミナーのスケジュール</p>	
8 月 3 日 (月)	<p>10:00 ~ 10:40 集合・セミナーの説明</p> <p>10:40 ~ 12:10 講師によるレクチャー</p> <p>12:10 ~ 13:00 昼食・現役学生との交流会</p> <p>13:00 ~ 15:30 リサーチ演習</p>
8 月 2 日 (金)	<p>10:00 ~ 12:10 プレゼンテーションの準備</p> <p>12:10 ~ 13:00 昼食</p> <p>13:00 ~ 15:30 プレゼンテーションとレビュー (ふり返り)</p> <p>15:30 ~ 16:00 修了式と「学内特別選抜入試」個別相談</p>
<p>(4) 参加資格</p> <p>① GS または JD への入学を検討している高校 3 年生</p> <p>② 2 日間の全日程に参加できる者</p> <p>③ 以下のいずれかの英語基準を満たしている者</p>	
<p>TOEFL ITP® テスト 520 点以上 / TOEFL iBT® テスト 68 点以上 / IELTS (Academic Module) Overall Band Score 5.5 以上</p>	
<p>(5) 申し込み方法</p> <p>別途指定する申込用紙 (※) に記入し、7 月 9 日 (火) ~ 7 月 19 日 (金) の期間中に国際関係学部事務室へ郵送してください (7 月 19 日 (金) の消印有効)。</p> <p>※「申込用紙」に記載すべき内容:「あなたの考えるグローバルリスク、ならびに将来どのような分野で活躍したいかを英語で簡単にまとめてください。」(A4 用紙、20 行)</p>	
<p>(6) 留意事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 申込者多数の場合は、申込用紙に記載する英語エッセイ・英語スコア等により選抜を行います。</li> <li>・ 本セミナーは「学内特別選抜入試」の出願資格となるため出願予定者は必ず申し込んでください。</li> </ul>	
<p>(7) 持ち物</p> <p>筆記用具、辞書、昼食</p>	
<p>(8) 終了証</p> <p>2 日間のセミナー終了後、受講者には「修了証」を授与します。「修了証」は、「学内特別選抜入試」へ出願する際の応募書類となります。</p>	
<p>2. 学内特別選抜入試 (概要)</p> <p>「GS/JD セミナー」参加者を対象とする「学内特別選抜入試」を実施します。詳細は、6 月に発表予定の入試要項を確認してください。</p>	
<p>&lt;概要&gt;</p>	
<p>(1) 応募期間</p> <p>2019 年 9 月 16 日 (月) ~ 9 月 20 日 (金) &lt;簡易書留速達扱いの出願期間最終日消印有効&gt;</p>	
<p>(2) 応募資格</p> <p>GS 専攻または JD 学科を第 1 志望とする高校 3 年生で、以下の条件ならびに要項の出願要件を満たしていること</p>	
GS	<p>・ TOEFL ITP® テスト 520 点以上</p> <p>・ TOEFL iBT® テスト 68 点以上</p> <p>・ IELTS (Academic Module) Overall Band Score 5.5 以上 のいずれか</p> <p>※ TOEFL ITP® テストは在籍する高等学校で受験したものに限り有効とします。</p>

JD	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ TOEFL iBT® テスト 76 点以上</li> <li>・ IELTS (Academic Module) Overall Band Score 6.0 以上 のいずれか</li> <li>※ TOEFL ITP® テストは不可</li> <li>* 高等学校第 1 学年から第 3 学年 1 学期終了時までの「全体の評定平均値」が 5 段階評価で「4.0」以上および、中学校「第 3 学年の評定平均値」が 5 段階評価で「4.0」以上の者</li> </ul>
----	---

\* TOEFL iBT® テストは Test Date スコアのみを活用します (My Best™ スコアは活用しません)。  
 \* 各試験の成績評価は、出願開始日よりさかのぼって 2 年以内に受験したものを有効とします。

(3) 応募書類  
 入学志願票、調査書、志望理由書および GS/JD セミナーレポート、英語スコア証明書、成績証明書、推薦書、2019 年度 GS/JD セミナー「修了証」のコピー  
 ※ JD 学科に出願する場合は、全て英語での応募書類の作成・提出が求められます。

(4) 選考方法  
 書類選考

(5) 合格発表日  
 2019 年 10 月 24 日 (木)

(6) 留意事項

- ・ 本入学試験は学内推薦に準じる取り扱いとします。合格した場合、本学部へ入学する意志を明確に持つ者を選抜するものです。趣旨をよく理解したうえで、出願してください。また、本入学試験に出願した場合、他の入学試験を併願することはできません。なお、本入学試験に不合格となった場合は、他の入学試験に出願することは可能です。
- ・ GS 専攻と JD 学科を併願することはできません。
- ・ JD 学科を志望する場合、外部の英語試験を受験したスコアの証明書、中学校の成績証明書 (英文) の提出が必要になります。本入試への出願を検討する生徒は早めに応募書類の準備をすすめてください。

2019 年度に開設した GLA も学内特別選抜入学試験を設定したが、事前のセミナー等は実施されず附属校生向けの AO 選抜入学試験という性格のものであった。

先行する 2 学部の動きを受けて、2018 年 7 月 26 日に開催の「高大連携検討委員会」では、「1. 入学試験と関連させ、特色ある附属校の人材を教学との関係で最もマッチする学部に入学させることの出来る構造の追求」が掲げられた。

そして、「教学のグローバル展開の最先端を担う層の立命館大学への進学促進」として「附属高生を対象とした JD/GS/GLA の AO 入試が今年度実施される。いずれもグローバル人材の育成に関わった政策的判断に基づく入試であるが、同様の考え方で、情報理工学部グローバルコース (理系のグローバル人材養成)、文学部キャンパス・アジア・プログラム (東アジア圏で活躍できる人材養成) においても、来年度以降セミナー方式等による AO 入試実施等の可能性を秋に向けて検討する」とし、情報理工学部および文学部で受け止めて検討がなされることとなった。

この検討の結果、2020 年度入試において情報理工学部、文学部の両学部が「学内特別選抜入学試験」を導入することが決定された。こうして、これまで 3 カ年に渡り学内特別選抜入学試験が実施されている。2019 年度から 2021 年度入試までの 3 年間の実施状況は次の通りである。

表 3 学内特別選抜入学試験実施状況

	2019年度		2020年度		2021年度	
	志願者数	合格者数	志願者数	合格者数	志願者数	合格者数
国際関係学部 グローバル・ステディ専攻	4	4	8	8	6	6
立命館大学・アメリカ大学 国際関係学部国際連携学科	0	0	1	1	1	1
グローバル教養学部	1	1	3	3	5	4
情報理工学部 システムグローバルコース			2	2	2	2
文学部東アジア研究領域 キャンパス・アジア・プログラム			1	1	1	1

### 3-4 附属校生を対象とした理工系学部における新たな入試方式の検討をめぐって

前述した通り、2018年7月26日に開催の「高大連携検討委員会」では、「1. 入学試験と関連させ、特色ある附属校の人材を教学との関係で最もマッチする学部に入学させることの出来る構造の追求」が掲げられたが、2点目の課題として理系学部における、「アワード」型 AO 入試（仮称）導入の検討をあげていた。

同委員会では、「例えば先日、守山高校の Sci-Tech 部が、SSH ロボカップ世界大会で総合準優勝するなど、附属校の生徒には、その環境を活かして『突出した』活動実績を挙げる事例が様々な分野で見られる。しかし、そのような生徒の中で、いわゆる学内推薦の枠（と成績基準等）の関係で、その能力を活かせる学部・学科等（希望する学部）に進学できないことが過去にあった。

立命館大学では、従来から数学オリンピック等、一定のイベントにおける入賞歴（出場歴）などを受験資格とする AO 入試が存在していたが、実際の受験者がほとんどいないなどの事情で現在はそのような入学試験は実施されていない。附属校には、一般の受験校とは異なる特徴として、様々な分野で思い切ったチャレンジをしている生徒が多い。そこで、附属高生に該当の学生がいた場合に、その能力を、最も適切な学部に進学することによって更に伸ばしていくことを目的に、『アワード』型 AO 入試（仮称）の実施の可能性について検討する。

但し、全学的に AO 型の学内進学を拡大を図ることは、現在の学内進学の制度的な見直しにつながる事となるため、この点については相当程度慎重な検討が必要となるし、本委員会の検討範囲を超える課題となる。従って、今回は理系分野を対象を絞り、出願要件となるイベント等についても高度なものを設定した上で、該当者が出たときに実施する AO 入試として、対象となるイベントや、出願要件（成績基準）のあり方等について検討を行なう」としていた。

その後、検討を進めたが2018年12月21日の「高大連携検討委員会」ではその結果を次のように報告している。

「附属校には、一般の受験校とは異なる特徴として、様々な分野で思い切ったチャレンジをし、賞を獲得する生徒が多い。そこで、附属高生に該当の学生がいた場合に、その能力を、最も適切な学部に進学することによって更に伸ばしていくことを目的に、『アワード』型 AO 入試（仮称）の実施の可能性について検討することとした。9月27日にBKC将来構想検討委員会理系学部・研究科課題検討部会（理系4学部長が参加する会議）に一貫教育部が出席し、『アワード』型 AO 入試の基本的なアイデアについて意見交換を行なった。学部長からは肯定的な評価を得たが、対象の『アワード』は学部・分野により異なること、入学後、その力を更に伸ばす仕組みをどの



ように考えるかなど、検討課題が多いため、2021 入試以降に入試として具体化する方向で更に検討を進めていくことについて確認した。今後一貫教育部（附属校）としての概要検討を進めるとされ、継続の検討課題となった。

この課題に関わり、2019 年 10 月 16 日に開催の「高大連携検討委員会」では、「今後の入試構造の方向性としては、附属校生にとって立命館大学と APU の各学部へ入学できるストリームを複線化・多様化し、出願時期と入試方式を『選べる』、『もっと挑戦（チャレンジ）できる』方向へ転換していくことが必要となっている」とし、「具体的に以下のような課題に着手することを検討したい。」と新たな課題設定として「理工系の研究活動につながる学部 AO 入試の検討」を掲げた。

「学部 AO 入試は、学部側からは、入学してほしい生徒・学生、学部教学を理解している生徒・学生、意欲のある生徒・学生等を早期に、確実に獲得できるメリットがある。また、附属校生徒からは、学びたい学部チャレンジし、早期に入学する学部の確定することができるメリットがある。しかし、現状では本学 AO 入試受験にあたっては、上記の通り一定の制約もある状況に置かれている。そこで、附属校から大学への入学構造や入試方式全体のあり方については、『2020 年以降の入学者構造・選抜のあり方検討委員会』での検討とも並行して進めることとするが、当面の重点として理工系の研究活動につながる学部 AO 入試のあり方について、高大で『ともに育てる』しくみの構築を目指して以下のような視点や項目等について検討を進めていくこととした。』とした上で、「\*単なるキャンパス見学のレベルではなく、サマースクールのような PBL 型の深い学びを附属校生が経験するイベントや AP 科目の履修等での学びを学部理解にもっとつなげるようなものへと変えていけないか。図書館、研究室などで附属校生が学ぶことができる条件や機会の創出なども合わせて検討する。\*附属校の高校段階での『課題研究』をどう学部で評価する『仕組み』をつくれるか。\*学部側での準備や対応するための作業の洗い出しも必要となる。\*単なる少子化ではなく、府県レベルの各高校における『理系クラス＝理系母体層』の急減の中で特に理工系学部での新しい AO 入試のあり方の検討は急務な課題となるのではないか。\*理工系の素養がある生徒を幅広い対象の中から発掘していく観点から、数学や理科の履修要件の弾力化・見直しの検討も必要となる。\*附属高校側での課題として、高2段階からの『課題研究』開始など、『課題研究』を実施していない高校でのカリキュラムのあり方も見直しもいるのではないか。\*教学部が構想している『1 回生時は全学共通初年次教育に参加、2 回生から各学部所属へ』、入試は『課題探究入試』を導入するという教育プログラムとのすり合わせも検討の価値がある。\* APU では、2021 年度に向けて総合型選抜（AO 入試）『世界を変える人材育成入試（日本語基準）』の実施を予定している。この入試は、ロジカル・フラワー・チャートを活用し、探究型の資質・能力（批判的思考力）を培い作成された小論文等を志望理由書等の出願書類とともに評価するという点に特徴があり、参考にしていきたい」など、検討にあたってのいくつかの視点を掲げた。

そして、『課題探究型』の大学入試方式の新規設定の検討は、附属校生のみが対象となるのではなく、高校教育での改革が進行する中で、多くの進学校が『探究型学習』や『問題解決型学習』のような取り組みを進めることが想定されることから、『主体性』評価の課題に対して立命館大学としてどのようにアプローチするののかという点からも大きな意味があると言える。結論として

は、『課題探究』的学習と『学部 AO 入試』とをどのような形でつないでいくことが可能となるか、『課題探究型入試（理工系）』（仮称）を検討するワーキンググループを本委員会の下に設置し、『モデル案』を作成することにした」とここで、検討の方向性を転換することとなった。

この WG のメンバーには、理工学部、生命科学部の入試担当副学部長、附属高校での副校長・教頭、一貫教育部の教職員が参加し検討を進めた

2019 年 12 月 23 日の第 1 回「検討 WG」で意見交換した内容は、「\* 学内推薦枠で理工系学部は希望する学部・学科にほぼ入学ができることから、附属校の生徒を対象として新しい入試方式の必要性はあるのかどうか？ \* 現状でも各学部の AO 入試の中で、課題研究的な取り組みを評価して入学できる制度はあり、新しい入試方式の必要性はあまり感じない。むしろ現状の学部 AO 入試を受験した場合に、学内推薦の被推薦権を放棄したことと見なす『ペナルティ』を無くせば、それだけでメリットは出るのではないか。\* 学内推薦入試では、学部上限枠を踏まえて、その枠内に収まるようそれぞれの附属校で人数を配分している。その各校での推薦枠を少しずつ持ち出して、『共通枠』を作り、その共通枠については、課題研究などでの優秀な生徒が優先して適用となるような仕組みを作れないか。ある種の『競争的環境』を生み出すことで学習のモチベーションを持たせられるようにしたい。そのために、高校のカリキュラムや科目のあり方を改革することが求められるのであれば対応もしていきたい。\* 新しい制度の枠組みではなく、生徒が学部の研究室選びまでができるような『個人』のネットワークができるようにできないか。附属校の生徒が大学の学生・大学院生とつながるとモチベーションがアップする。4 つの理工系学部全体が一緒でなくとも、できる学部から、できる学科からというアプローチが良い。\* 附属校での課題研究の授業の進度に応じて、大学の先生方や学生・大学院生からのアドバイスやコメントをもらえる機会ができないか。早い段階であれば、テーマ設定に関するアドバイス、中間発表や最終発表ではコメントなど。また、特に理工系のテーマを設定した附属校生が大学の研究室に訪問して、自分の進めようとしている課題研究についての議論を交わすようなことで『研究室』に触れるような機会を設けてはどうか」などであった。

今後の高大接続改革でも求められる「課題研究」的な学習が中学校・高校・大学学部・大学院の教育へつなげていけるような仕組みの検討が重要となるという点では認識の一致ができた。

そして、2020 年 3 月 6 日の第 2 回「検討 WG」で今後の進め方について以下のように確認した。

「①附属校での「課題研究」の取り組みの早い段階から、学部教員や学生・大学院生からのアドバイスやコメントが得られるなどの工夫の設定。理工系の『研究室』へ附属校生徒が参加できる機会の創出など。②学部の教員が『課題研究』の取り組みに触れて、その内容についてリアルに理解し、生徒のレベルの高さに触れる機会の創出など。③課題研究に対応した新しい入試方式に関しては、現行で学内推薦枠のある学部 AO 入試を受験した際のペナルティの見直しや何らかのインセンティブを与えるような検討を進めていくことができないか、SSH などの取り組みも視野に入れた対応策が求められる。④まず 2020 年度に向けては、①②に関して別途の体制を設けて検討を進め、附属校と理系学部の関係者で意見交換・すり合わせをし、実施可能なプランの策定につなげる」こととした。

そして、2020 年 3 月 18 日開催の「高大連携検討委員会（一貫教育委員会と合同開催）」では、2020 年度の検討課題として、「附属校における『課題研究』の取り組みをいかに大学の理系学部

の教育につなげていくのかということに力点を置き、まずは附属校の理科担当教員を中心とした『課題研究プロジェクト・理系』を設けて各種の方策や取り組むべき内容を検討していく。検討した結果を大学の理系学部教員とも情報共有・意見交換を進めて、具体的な実施プランの策定にまでつなげたい。なお、『課題探究型入試（理工系）検討WG』で今後の課題として残した、現行の取り扱いで学内推薦枠のある学部AO入試を受験した際に課しているペナルティの見直しや、何らかのインセンティブを与えるような検討を進めていくことができないかということについては、理系に限らず文・社系も含めた課題として別途、検討を進める」とされた。

2019年度の「高大連携検討委員会」の主要な課題として位置付けたのは、附属校における「課題研究」の取り組みを何らかの形で、理工系学部における学内特別選抜入学試験のような入試方式に結実させることができないかということであった。しかし、附属校と大学との高大接続教育の重要性について再確認されたものの、一方で高等学校側・生徒にとって大きなメリットにはなりにくい状況が明らかとなった。すなわち、附属校から立命館大学の理工系学部に進学するための主要な入試方式は推薦入学試験となるが、現状では、各附属校向けに与えられている推薦枠は、小規模な薬学部以外については余裕がありほぼ第一希望での学部・学科選択が可能な状況にあることからである。したがって、別の形態での高大接続教育のあり方を継続課題として残すこととなった。

### 3-5 理工系学部における「課題研究アワード」の取り組み

各附属校では高等学校段階での探究型学び＝「課題研究」が意欲的に取り組まれている。これは、大学入試のための受験勉強的な学びに取り組む必要が無い附属校ならではの意欲的・積極的な学びであり、新学習指導要領などで示されている、今後に求められる先進的な学びの先取りでもある。

附属高校ならではの特色ある教育の展開として、受験勉強型学力とは異なる、探究型学びが進展してきており、チャレンジングな取り組みがされている。こうした高校段階での探究型学びを大学（学部）入学後につなげることの重要性についても論を俟たないことである。

とりわけ理工系学部での高大接続教育のあり方はどうつなげていくのかの検討が進められた。新たな入試方式の策定にまでには至らなかったが、2019年度理工学部入学予定者を対象とした高大連携企画として「理工学部附属校『課題研究アワード』」が実施された。これは、課題研究に取り組む高校3年生（理工学部学内に推薦入試で入学予定の者）がBKCに一同に会し、自らの課題研究の成果を発表し、それを表彰する取り組みである。この企画の目的は、附属校生の探究的学習に対するモチベーションを高めるとともに、附属校の生徒が大学入学前に集い、出身校以外の附属校生との親交を深めることにもある。また、附属校生、附属校教員、理工学部教員がアカデミックな繋がりを持つことで、高大の連帯感、一体感を深め、附属校出身者の各附属校の垣根を超えたネットワーク醸成にも繋がるのが期待されているものでもある。

企画スケジュールとしては、①開会あいさつ②交流会（自己紹介、理工学部入学後の将来像などを考える簡単なワーク）③課題研究発表会（各附属校より発表、理工学部教員・附属校教員・参加学生による審査）④審査結果発表・優秀賞授与（理工学部長賞（金賞）、銀賞、参加賞）⑤懇親会⑥閉会などとなっている（2020年2月22日実施分より一部抜粋）。2019年度入学者を対

象とした第1回は60名、2020年度入学者を対象とした第2回は62名の附属校生徒の参加を得て実施した(理工学部、附属校、一貫教育部の教職員は除く)。

2021年度入学予定者を対象として実施する3年目を迎えるこの取り組みは、理工学部と生命科学部の2学部が共催して行うこととなりさらに充実するものとなっている。さらに、学部の学びに触れ理解する高大連携企画という位置づけから、大学入学前の大学0回生としての学びや研究の先行実施という高大接続教育=入学前教育としての位置づけに変更して実施することとなった。

## 4 R2030 チャレンジ・デザイン推進に向けた取り組み

### 4-1 R2030 チャレンジ・デザインで新たな認識となった「次世代研究大学」構築に向けた小中高大院一貫教育システムによる教育展開の高度化の重要性

立命館は学園をあげて、R2030 チャレンジ・デザインを策定した。立命館大学、立命館アジア太平洋大学、そして附属各校もそれぞれの掲げたR2030 チャレンジ・デザインを推進・具体化していくことが求められる。とりわけ、立命館大学では「次世代研究大学」の構築を標榜しており、そのことは附属校を含めた小中高大院一貫教育システムによる教育展開のこれまで以上の高度化が求められており、その内実化がなければ実現できない課題となっている。

こうしたことを展望したとき、これまでの高大連携・高大接続教育の到達点の上に、国際系・グローバル教学の展開との関係では、経営学部国際経営学科、経済学部国際専攻などで中学校・高等学校段階と大学学部での新たな高大接続のあり方を具体化できる可能性がある。また、高等学校での「課題研究」(特に理工系の研究テーマ)の取り組みとのシームレスな高大接続教育の展開との関係では、理工学部、生命科学部での取り組みに加え、スポーツ健康科学部、食マネジメント学部、情報理工学部、薬学部、文学部、映像学部、総合心理学部などで具体化をすすめることができる可能性があると考えられる。

2020年度から2021年度に向けては、R2030 チャレンジ・デザインで掲げた基本政策の実現に向けた実施基本計画(アクション・プラン)を年次計画として策定していくべきタイミングともなることから、立命館大学の各学部と綿密に連携・調整をはかりながら壮大なアクション・プランを編み上げていくことが必要となろう。

### 4-2 総合的な一貫教育を推進する今後の立命館学園の発展に向けて

今日、R2020 学園基本計画を推進してきた立命館学園は、立命館小学校、立命館中学校・高等学校、立命館宇治中学校・高等学校、立命館慶祥中学校・高等学校、立命館守山中学校・高等学校は、立命館小学校が『世界の100校』6)に選ばれるような評価を得るまでに至り、全ての附属高等学校が『SSH』7)、『SGH』8)、『WWL』9)などに採択されるという実績を築くなど全国レベルでも注目される学校づくりが進み高い到達点にあると言える。

また、立命館大学、立命館アジア太平洋大学の両大学もSGU創生支援事業に採択されたこともあり、教学のグローバル化は加速してきている。こうしたそれぞれの学校単位での先進的な取り組みをお互いに確認しあうとともに、R2030 チャレンジ・デザインの具体化に向けては、一貫



教育としての強みやメリットを生かした学園の総合力を発揮し、全体としての教育と教学のさらなる高度化をはかっていくことが重要となろう。

今後の立命館学園の発展に向けて、この数年間に様々な議論や検討を踏まえて実践してきた「立命館高大院接続システムの構築—高大接続教育の新展開」の取り組みがその端緒とも言うべきものであったとして、後の世に評価されんことを望むばかりである。

## 注

- 1) 「グローバル 30 とは？」 ([https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/03/30/1383779\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/03/30/1383779_01.pdf), 2020.12.17)
- 2) 「スーパーグローバル大学創成支援事業とは」 ([tgu.mext.go.jp/about/index.html](http://tgu.mext.go.jp/about/index.html), 2020.12.17)
- 3) 「スーパーグローバル大学創成支援 (タイプ B) 立命館大学取組概要」 ([https://www.jsps.go.jp/j-sgu/data/torikumigaiyou/h26-r1/sgu\\_h26-r1initiatives\\_b22.pdf](https://www.jsps.go.jp/j-sgu/data/torikumigaiyou/h26-r1/sgu_h26-r1initiatives_b22.pdf), 2020.12.17)
- 4) 「立命館大学の取組概要」 ([tgu.mext.go.jp/universities/ritsumei/index.html](http://tgu.mext.go.jp/universities/ritsumei/index.html), 2020.12.17)
- 5) 「平成 23 年度大学の世界展開力強化事業構想の概要【キャンパス・アジア中核拠点形成支援】」 (<https://www.jsps.go.jp/j-tenkairyoku/data/shinsa/h23/a1010.pdf>, 2020.12.17)
- 6) 「本校が『世界の 100 校』に選ばれました」立命館小学校 HP ([http://www.ritsumei.ac.jp/primary/news/detail?post\\_id=357](http://www.ritsumei.ac.jp/primary/news/detail?post_id=357), 2020.12.17)
- 7) スーパーサイエンスハイスクール HP (<https://www.jst.go.jp/cpse/ssh/>, 2020.12.17)  
立命館高等学校 SSH HP (<http://www.ritsumei.ac.jp/fkc/education/ssh/index.html/>, 2020.12.17)  
立命館慶祥高等学校 SSH HP (<https://www2.spc.ritsumei.ac.jp/math/ssh/>, 2020.12.17)  
立命館守山高等学校 SSH HP (<http://www.ritsumei.ac.jp/mrc/education/feature/science.html/>, 2020.12.17)
- 8) スーパーグローバルハイスクール HP (<https://sgh.b-wwl.jp/>, 2020.12.17)  
立命館高等学校 SGH HP (<http://www.ritsumei.ac.jp/fkc/education/sgh/index.html/>, 2020.12.17)  
立命館宇治高等学校 SGH HP ([http://www.ujc.ritsumei.ac.jp/ujc\\_e/sgh/](http://www.ujc.ritsumei.ac.jp/ujc_e/sgh/), 2020.12.17)  
立命館慶祥高等学校 SGH HP (<https://www2.spc.ritsumei.ac.jp/global/sgh/>, 2020.12.17)
- 9) WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業 HP (<https://b-wwl.jp/>, 2020.12.17)  
立命館宇治高等学校 WWL HP ([https://www.ujc.ritsumei.ac.jp/ujc\\_e/wwl/](https://www.ujc.ritsumei.ac.jp/ujc_e/wwl/), 2020.12.17)

## 参考文献

本稿の執筆にあたり、一貫教育委員会の下に設置された「附属校と大学との高大連携検討委員会」および同委員会内での「『課題探究型入試 (理工系)』 (仮称) 検討ワーキンググループ (WG)」、常任理事会の下に設置された「2020 年度以降の入学構・選抜のあり方検討委員会」のほか「立命館大学グローバル・イニシアティブ推進本部会議」、「常任理事会」の資料等を引用 (参考) とした。用いた資料は以下の通りである。

「意見集約を踏まえた R2020 後半期以降の立命館大学と附属校との接続教育に関する提案—『附属校と大学との高大連携検討委員会』2017 年度報告—」 (一貫教育委員会、2018 年 4 月 18 日)

「第 1 回『課題探究型入試 (理工系)』 (仮称) 検討ワーキンググループ (WG)」、2019 年 12 月 23 日

「第 2 回『課題探究型入試 (理工系)』 (仮称) 検討ワーキンググループ (WG)」、2020 年 3 月 6 日

「附属校と大学との高大連携検討委員会」、2017 年 7 月 12 日

- 「附属校と大学との高大連携検討委員会」、2018 年 1 月 10 日  
「附属校と大学との高大連携検討委員会」、2018 年 6 月 20 日  
「附属校と大学との高大連携検討委員会」、2018 年 7 月 26 日  
「附属校と大学との高大連携検討委員会」、2018 年 12 月 21 日  
「附属校と大学との高大連携検討委員会」、2019 年 10 月 16 日  
「附属校と大学との高大連携検討委員会」、2020 年 3 月 18 日  
「第 1 回立命館大学グローバル・イニシアティブ推進本部会議」、2015 年 1 月 28 日  
「第 11 回立命館大学グローバル・イニシアティブ推進本部会議」、2017 年 12 月 15 日  
「第 12 回立命館大学グローバル・イニシアティブ推進本部会議」、2018 年 1 月 31 日  
「『2020 年度以降の入学者構造・選抜のあり方検討委員会』の検討状況報告」（常任理事会、2018 年 4 月 18 日）  
「学園ビジョン R2030 立命館大学チャレンジ・デザイン」（常任理事会、2020 年 11 月 4 日）  
「立命館一貫教育・附属校の R2030 チャレンジ・デザイン」（常任理事会、2020 年 11 月 4 日）

## Construction of Ritsumeikan High School Connection System

New development of high school High school-university cooperation education Collaboration and strengthening with each faculty (especially global faculties)

KAWAGUCHI Kiyoshi (Managing Director, Division of Integrated Primary and Secondary Education, The Ritsumeikan Trust)

### Abstract

The Ritsumeikan Academy has 1 elementary school, 4 junior high schools, and 4 high schools in addition to Ritsumeikan University and Ritsumeikan Asia Pacific University (APU). In recent years, education corresponding to internationalization and globalization have been developed by the distinctive advanced efforts of each school.

Under these circumstances, some students go on to other universities without going on to Ritsumeikan University and APU from the attached high school, and it is an issue to strengthen the educational connection between the attached school and Ritsumeikan University again. In terms of going on to university, it is necessary to consider a new entrance examination method, and we started high school-university cooperation education as a pilot program with the concept of "cultivating together".

This paper historically looks back on the status of examinations and discussions at the university committees, etc., leading to the current goal, and presents the issues and prospects that remain in the future.

### Keywords

High school-university connection education, High school-university cooperation, Inquiry learning, Themed research, Internationalization and globalization of education, Top Global University Project (by MEXT), R2030 Academy Vision (by Ritsumeikan Academy)

